

◎小学生の部

太田玉茗賞

グラウンド

須影小学校 六年

牟田口 龍

真夏の暑いマウンドに立った  
ぼくは いつも感じる  
仲間の張り上げた声  
僕の球を打つという相手の気迫

グラウンドの上で  
仲間とともに 汗を流したという自信が  
僕を前に走らせる

ゴロをさばきファーストへ  
土をまきあげスライディング  
審判の「アウト」の声

いつまでも忘れないだろう

このグラウンドにつまった思いと  
仲間とともに感じた友情

## 優秀賞

### わたしのすきな風けい

新郷第一小学校 四年

池澤 萌々香

夏に向かって太陽が  
どんだん元気になってくるころ  
わたしの家のまわりは  
みどりの海になる

風がふくと波をうって  
一つ 一つの田んぼで色もちがう

太陽の光をいっぱい  
明るくきれいなみどり

雲がいっぱい広がって  
少し重いみどり

たくさんの雨をうけて  
うれしそうないみどり

起きてすぐ

いっぱいのみどりの海を見ると

とっても気持ちがいい

太陽の下

自転車に乗って走ると

サラサラと波がわたしをおってくる

夕方に

オレンジ色の光をあびた海は

キラキラとすごくきれい

本当の海は羽生にはないけど

わたしは

このみどりの海が

大好きです

## 羽生でまってるよ

須影小学校 三年

清水 健太

あかぎおろしのふくさむい朝

北風で手がこおりそうだ

「よいしょ、よいしょ。」

重い水そうをかかえて

利根川の土手を登っていく

今日はサケの放流会

いよいよ お別れの日だ

氷のはっている

つめたい水の中に

ゆつくりと水そうをしずめた

サケが自分から出て行くのをまつ

一ぴき また一ぴきと

サケが川に向かっていく

なかなか出て行かないサケが三ぴき

こわいのかな がんばれ

十分くらいまって

サケは やつと出て行った

「バイバイ、元気でね。」

空<sup>から</sup>になった水そうを見て

ぼくはさびしくなった

そしたら さっきのサケが

バイバイってあいさつするように

ぼくのところへもどってきた

ぼくはうれしくなった

「バイバイ、ありがとう。」

サケたちはスイミーみたいに

大きな海をめざして泳いでいく

大きな魚に食べられちゃだめだよ

スイミーのように知恵を使って

生きのびるんだ

どんなにこわくても勇気を出して

がんばるんだ

そしてきつとまた

この利根川で会おう

サケに負けないように

ぼくも大きく強くかしくなってる

この羽生でまってる

中学生になったぼくがまってるよ

## ひいおばあちゃんと百日草

新郷第二小学校 四年

塚田 聖悟

赤、白、黄色、ピンク：

百日草がきれいにさくころ、お盆が来る。

今年も、家族みんなが集まった。

みんな、なつかしそうに

ひいおばあちゃんの話をする。

「ひいおばあちゃんは、入院するまで

あんなに元気だったのね。」

と、おじいちゃん、おばあちゃん。

「庭の百日草は、ひいおばあちゃんが

最初に植えたそうですね。」

と、お父さん。

「小さかったころ、よく遊んでもらったよ。」

と、お兄ちゃん。

ぼくだけ、ひいおばあちゃんを

覚えていない。

ぼくが赤ちゃんのころ、

ひいおばあちゃんは、なくなつた。

お母さんが教えてくれた、小さな思い出。

お母さんが赤ちゃんのぼくをつれて  
病院におみまいに行ったときのこと。

ひいおばあちゃんが、

「だっこしてあげる。」

と言ったら、ぼくが両手を出したんだって。

ひいおばあちゃんは、うれしくて

何度も病院の人に、そのことを

話してたんだって。

仏さんには、ひいおばあちゃんの

笑顔の写真と百日草。

「ひいおばあちゃん、今年も

百日草がきれいにさいたね。

ぼく、クロールが上手になつたよ。

漢字もたくさん覚えたよ。

ローマ字だって書けるんだよ。

ぼく、今日、十才になつたよ。

こんなに大きくなつたんだよ。」

# 佳作

## わたしのかぞく

羽生北小学校 二年

石井 梨鈴

わたしのかぞくは  
おとうさん おかあさん  
そしてうさぎのマカロニ

マカロニの毛はちや色くてふさふさ  
マカロニの目はくろくてくりくり  
マカロニの耳は長くてぴーん  
マカロニのしっぽはみじかくてふわふわ  
マカロニはとってもきれいずき  
おなかをペロペロ せなかをペロペロ  
足をペロペロ ぜんぶペロペロ

「マカロニー！」  
わたしが歩くとおいかけてくる  
わたしの足もとをクルクルまわる  
あそんでほしいと  
はなでツンツン 前足でカリカリ

おひるになるとおうちでカクンカクン  
マカロニのねる時間  
目はトローン 耳はピタッ

マカロニ かわいいね  
マカロニ あったかいね  
マカロニ 気持ちいいね  
これからもずっとずっと一しよだよ

## あつたかいあいさつ

新郷第一小学校 六年  
岡崎 満莉奈

「ただいまあ。」  
「おかえりなさい。」  
いつも いつも交わす  
私と母の毎日の言葉  
いつもと変わらぬ言葉だけど  
あつたかい 心があつたまる  
元気な証拠  
この言葉の中に  
いろいろな思いがまつてる  
私の帰りを待っている  
母の心がまつてる

「ただいま。」  
「おかえり。」  
たつた四文字 心のこもつた四文字  
その次には 止まることなく会話が  
今日一日のこと  
学校であつたこと  
友だちのこと

先生の話したことなど：  
いつまでも続く

どんなにいやなことがあつた日でも  
家族と交わす会話で  
いやなことを忘れる  
楽しかったことは 何倍も楽しくなる  
悲しかったことは 半分にへつていく  
家族つて大切であつたかい  
これからも たくさんの  
会話をしていこう

# 「ケーン、ケーン」

新郷第一小学校 三年

角田 実優

わたしのいえの近くの草むらには  
大きなきじがすんでいた  
草の中にすんでいた

よるになると どこからか  
ケーン、ケーンとないていた  
おくびようで すぐにかくれちゃうんだよ  
ひよこみたいなよちよちあるきなんだ

この夏 草むらにブルドーザーが入り  
草はかられ  
草むらの中の一軒家みたいな一本の木も  
たおされた  
なんにもなくなっちゃって  
きじのすがたも なくなつた  
どこにいったのかな  
きじ  
元気にしてるかな  
きじ

きじのことがしんぱいになつて

あつい夏

毎日毎日

考えた

毎日毎日

ながめてた

なんにもなくなつたはらっぱを

きじはすがたを見せなくて

「いっぱい草があるところに引っこしたの  
かな。」

つて思ったよ

また会えるといいな

わたしの心のはらっぱで

きじは

ケーンケーンと

よんでいるよ

## まっくろくろすけ

新郷第二小学校 一年

成兼 樹

なつやすみに、ぼくのいえに、  
あたらしいかぞくがやってきた。

からだがぜんぶまっくろで、

トトロにでてくる

「まっくろくろすけ」に、

そっくりないぬ。

みんなでそうだんして、

「くろすけ」に

なまえはきまった。

くろすけは、ほんとうにまっくろだ。

「まっくろくろすけでておいで」

とよぶと、

まんまるにまるまっていたくろすけが、

まっくろなしっぱを

ふりふりしてよってくる。

すこしすると、

また、まんまるになって、

まっくろくろすけになる。

よるに、

「まっくろくろすけでておいで」

とよぶと、くらいところから、

べろをぶらぶらしながらよってくる。

よるのくろすけはちよっとこわい。

ぼくもひやけしてくろいけど

くろすけのほうがもつとまっくろだ。

こんどのなつは、

くろすけにまけないように

そとであそんで

まっくろになるぞ。

# わたしの大好きな利根川

新郷第一小学校 六年

吉田 めぐみ

私と母と愛犬メリーと散歩する  
利根川の土手

メリーは うれしくてうれしくて  
思いつき風車のような  
ふりこのように しつぽをふる

緑の葉が サラサラとゆれ  
やさしい風が そよそよと吹く  
川面の水が キラキラと光る

土手に上がって見る  
私の大好きな景色

友だちと口げんかしたりして  
いやなことがあつたりしても  
この土手に立つと  
すーっと消えていくようだ

夕焼けに染まった空と

真っ白な一本の飛行機雲

私もメリーも

この土手に来ると

元気をもらう

また 明日もがんばるぞと

いつも 元気をもらう

メリーまた来ようねと話しかけた

メリーのしつぽが

また 速いふりこになった

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
曾祖母の手押し車	新郷第一小学校 五年	飯田 健太郎
おしっ様	岩瀬小学校 四年	伊藤 杏
ぼくの家の記念樹	新郷第一小学校 五年	及川 夕翔
夏において	新郷第二小学校 六年	小澤 由衣花
ふるさとつてなに	井泉小学校 五年	尾上 芽衣
終わりなき挑戦	新郷第二小学校 六年	柿沼 伸亮
友だち	羽生北小学校 二年	亀田 健介
四季のジュウタン	村君小学校 四年	志賀 聖
花しょうぶ	新郷第二小学校 二年	堤 莉穩

## ◎中学生の部

### 太田玉茗賞

#### 藍染めのハンカチ

西中学校 一年

渡邊 南帆

祖母のバッグからのぞく青いハンカチ  
私は何気なく手にとり  
陽に当てて透かしてみた  
青い布地に  
ふわっとかかった白い模様  
まるで真夏の青空に浮かぶ  
真っ白な雲のよう

「これ：私が染めた藍染めのハンカチだ！」  
四年前の校外授業の記憶がよみがえる  
つんとただよう藍のにおい  
恐る恐る藍の中に手を入れたっけ：  
きれいな色に染まるかな  
白い模様ができるかな

期待と不安が入り交じり  
やっと完成した私だけのハンカチ  
：その時の藍染めのハンカチだったのだ  
今は日焼けで真っ黒な私  
毎日からフルなタオルで  
汗をぬぐっているけれど  
十年後には藍染めのハンカチが似合う  
やさしくて温かい  
羽生の女性になれるといいな

優秀賞

気球に乗って

西中学校 一年

一戸 里美

気球に乗って まちをながめた  
羽生のまちは思ったよりも広いみたいだ  
私の家がみつからない

うしろをみると  
利根川が東西に流れる  
川は広く どこまでも続いていて  
頭としっぽがかすんでみえない

下をみると  
たくさんの大人達が  
私達を楽しませようと  
汗をかき まっ黒に日焼けしながら  
走りまわっている

空は青くどこまでも続いている  
まちは広くどっしりと私を支え続けている  
川は私の未来のように  
はてしなく続いている  
大人達は私をあたたく見守り続けている  
私は今 その真ん中に いる

## 登校する道で

東中学校 三年

岡戸 洸樹

毎日通うこの道  
季節が変わると  
決まったように  
同じ場所に 同じ種類の花が咲く  
しかしそれは  
去年と同じ花ではない

僕はどうか  
同じ僕だが  
同じ僕ではない  
去年の僕とは違っている  
人生を進むということ  
自分の歴史を作っていくということ  
思い出をたくさんかかえるということ  
悲しみもかかえるということ

今年の春 祖母が亡くなった  
たくさんの花に囲まれ

天国へ行ってしまった

でも

祖母の優しい笑顔は  
僕の中に生きている  
変わらないものもあるんだ

道ばたに咲いた花たちが  
明るい光を受けて輝いている

自転車を止めて  
空を見上げた

「僕の場所は、ここだよ。」  
僕の心も

光を受けている  
天からの優しい光

信号は青に変わる  
光の中を進みながら  
少しずつ強くなっていける気がした

## 獅子が舞う十五夜祭

西中学校 一年

河田 穂

カンカンカン 二つの剣がぶつかる  
何カ月間も おしいれの中で眠っていた剣  
外に出た剣は 静かにほほえむ  
二つの剣は 一年分の力を出した  
静かに 優雅に 力強く

パカパカパカ 三つの獅子が踊る  
何カ月間も おしいれの中で眠っていた獅子  
笛に合わせて たてがみをゆらす  
豊作祝って 激しく吠える  
三つの獅子は 一年分の力を出した  
厳かに 優雅に 力強く

ピーヒャラ ピーヒャラ  
たくさんの笛たちが奏でる  
何カ月間も おしいれの中で眠っていた笛  
笛たちは 一年分の力を出した  
真つすぐ 優雅に 力強く

## 佳作

### 私のふるさとの味

西中学校 一年

穂山 遥名

炊きたて あつあつもち米を  
うちわで扇ぎながらさます  
一つ一つ心をこめて手の平で転がしながら  
リズムよく握る  
それに あまーいあんこをたつぶりつける  
その名は「ぼたもち」  
私の大好物

ばあちゃんのおぼたもちは 野球ボールぐら  
いある  
大きな大きなぼたもち

もっちりとしたもち米  
あんこは手作り  
大きな釜で半日もかけてじっくり煮る

釜から小豆のいい匂いがしてくる  
早く食べたくなる  
ばあちゃんが汗を流しながらひたすら混ぜ  
てゆく  
私は いつかはこの味を引き継ぎたい  
私のふるさとの味を：

## 好きな場所

南中学校 二年

天田 拓巳

僕の家は近くに僕の大好きな場所がある

普段は普通の田んぼ道だけど

毎日6時をすぎると

僕の特別な場所へと変わる

そこにはとてもきれいな光景が広がる

真っ青な空を真っ赤にそめつくすほどの太陽

その日の光をうけ

つねに変わり続ける雲

その雲に日の光があたって

空がオレンジ色になったその風景が

僕は大好きです

ふと気がつくと僕は

いつものまにかカメラを手にとっていた

そしてその風景を見ながら

シャッターを切っていた

こんなことが出来るのは

その風景をじやまするものがないからだ

まわりはみんな都会がいいと言うけれど

都会じゃこんな景色は見られない

だから僕はここがいい

都会でもなければ

人のあつまる商店街でもないけれど

きれいな景色の見える

そんな小さな小さな幸せぐらいしかないかも

しれないけれど

僕はここが好き

## 歩いて三分の世界には

西中学校 三年

長壁 友里香

私の家から 歩いて三分のところに

昔 よく遊んだ公園がある

中に入ると 懐かしい遊具たち

小さくなつたね 君たちも とからかったら

君が大きくなつただけだ

ぼくたちは 何にも変わってないようって

笑いながら いい返された

私の家から 歩いて三分のところに

ガンガン音を鳴らしている 工事中の家

そう言えば 昔はここ 何もなかった

住人さんが来たら 新しいご近所さんだから

あいさつをしに行ってみようかな

私の家から 歩いて三分のところに

いっぱい野菜をつくっている 畑がある

額は 汗ダラダラで 光っているし

体中 どろで真っ黒け

こんにははって 声をかけたら

つるつるの真っ赤なトマトと

イボイボだらけの キュウリをくれた

こんな暑い中 一生懸命に

頑張つてつくっているのだから

きつと おいしいだろうな

おじさん ありがとう

家族の夏バテも これでなくなりませう

いつもは 何気なく スタスタ歩く道も

ゆっくり ゆっくり 歩いてといくと

私は ビデオカメラになれる

これは 撮影中に感じた

体の中を すうっと風が通り抜ける感じも

いつまでも保存できる 優れものだ

私はこれを使って たくさん

家から歩いて三分の世界を取材する

私がこれから大きくなってここを離れても

世界でたった一つだけの私のふるさと

私が初めて歩いたところを 忘れないために

## つながり

西中学校 三年

川野辺  
晏実

登校中

自転車をこぐ足は痛みを感じ始めて  
とかしてきた髪はぼさぼさにかき乱され  
前方より強風  
必死でこいでも進まないじれったさ  
遅刻への危機感と焦り

それでも頑張って  
必死になって交差点をこえると  
風はとたんに私の味方になる  
私の背中を力強くおしてくれる  
自転車だって勝手に進むくらい 強く

悠々と自転車をこぎながら ふと  
みんなこの風に吹かれながら  
登校しているんだろうな  
兄や父も 同じ風を感じたにちがいない  
来年入学する弟も これから

この風景とか 住んでる人とかは  
少しづつ変わっていくけど  
変わらないものもあると思う  
この風とか きれいな星とか  
やさしい土とか トマトとか

そういうものは  
人と人を 過去も未来も つなげてくれる  
今の私は過去の私になって  
未来の私につながる

そして私は今 みんなみんなと  
つながっている  
そう感じる

## ふるさとを感じて

西中学校 二年

蓮見 世奈

羽生の姉妹都市バギオへ行った  
すずしくて自然がたくさん 人も親切  
初めて行ったのに  
なぜか羽生を感じる

もつともつとバギオを知りたい  
もつともつとバギオと親しくなりたい  
もつともつと英語で話せるようになりたい  
もつともつと羽生を知ってほしい

あつという間の六日間  
もつといたって思っていたのに  
日本に着いたら ほっとした  
胸がきゅんとなる

バスで羽生に近づいた  
そうそう これこれ この感じ  
わたしのふるさと 羽生  
羽生が「おかえり」って言っている

バスを降りれば  
そうそうこの風 羽生の風  
そうそうこのにおい 羽生のおい  
そうそうこの音 羽生の音  
目をつぶってみても  
ここは羽生

家族に会ったら  
もつともつとほっとした  
みんなの笑顔がうれしくて――

「ただいまうら」  
やっぱり私のふるさととは「羽生」  
わたしのふるさととは「わが家」

その他の良い作品

題	学校名・学年	氏名
おばあちゃんの煮物	南中学校 一年	伊藤 ひかり
通学路	西中学校 三年	稲生 莉紗
ゴーヤ	南中学校 三年	太田 正悟
ふるさとの味	西中学校 二年	川島 光道
大切な場所	西中学校 三年	関口 真史
私の日課	南中学校 一年	武井 真珠
永遠に	西中学校 三年	千葉 高志
秩父鉄道	西中学校 一年	富岡 大貴
菜の花の咲く頃に	東中学校 三年	根岸 達也
うどん	西中学校 三年	星野 香南子
夏の声	西中学校 二年	松岡 佐紀
ふるさとの詩	西中学校 三年	山崎 夏波